

落合偉洲 著

『家康公の時計：四百年を越えた奇跡』

（平凡社、2013年）

評者 坂東 省次

今年の3月頃であっただろうか、スペイン人ビスカイノ大使が家康公に時計を献上したことを証明する文書をご存知ないですか、といった文面がメールでスペイン史研究者に送られ、それがスペイン史研究者の一人を通じて私にまで届いていた。

1609年9月30日のこと、フィリピンからメキシコに帰る前臨時総督ドン・ロドリゴ・ビベロを乗せたガレオン船「サン・フランシスコ号」は暴風雨のために千葉県御宿の沖で座礁し、ビベロほか367人の乗組員が遭難して御宿岩和田田尻の海岸に漂着したところ、村人たちが救助に全力を尽くし、その結果317人の命が救助された。当時、家康公は太平洋貿易に日本人が参加することを熱望しており、家康と高官ビベロとの間には、多年懸案の日本・メキシコ間の貿易問題を協議すべく初の外交交渉が行われた。

ビベロの帰国から一年後の1611年、同名の「サン・フランシスコ号」で、スペインの探検家で商人のセバ스티アン・ビスカイノがスペイン国王フェリペ3世の派遣大使として、またとくに難破、座礁した後、救援を受けたビベロら一行に対する答礼使として来日する。ビスカイノは、1611年7月、駿府で家康公に面会し、スペイン国王からの書簡及び贈り物を家康公に献上している。

贈り物の一つに時計があり、それが「家康公の時計」として伝えられてきた。このことは松田毅一著『伊達政宗の遣欧使節』（新人物往来社）の中でも触れられており、また「異国日記」にも言及はあるが、献上物の目録の紹介はどこにも見当たらない。

久能山東照宮の宮司である落合偉洲氏は、この度刊行した『家康公の時計：四百年を越えた奇跡』の中で、初めて「家康公の時計」の目録を公にしている。それは次の通りである。「家康公の外交顧問を務めた、金地院崇伝の「異国日記」（京都・金地院所蔵、重要文化財）が残されています。「異国日記」には、ビスカイノらスペイン使節団によるノビスパン（ヌエバ・エスパーニャの日本での呼び名）からの進物目

録が登場します。この中に「一斗景 壺ケ、一蓑衣 一對上下、一卷物 一反、一南蛮酒 両樽…」と真つ先に、「斗景（時計）」のことが記されている。」

こうして、「家康公の時計」は、ビスカイノが持参した贈り物であることが判明した。さらに、落合氏によれば、この西洋時計は、フェリペ2世お抱えの時計師ハンス・デ・エバロが製作したものであり、スペインのエル・エスコリアル宮殿兼修道院には同じ作者が1583年に製作した時計が保管されている。フェリペ2世の父親であるカルロス1世の時代から、歴代の国王が時計を珍重して収集、かなりの時計が保存されていたが、スペイン内戦によって散逸したようで、現存する最古の機械式時計はこの時計だけだという。

1584年に天正遣欧使節が完成間もないエル・エスコリアルを訪れており、その時フェリペ2世から時計を贈られた。帰国後、使節一行が大阪城に秀吉公を謁見した際、その時計を公に贈った記録が残っているといわれるが、時計は残念ながら紛失して現存しておらず、「家康公の時計」が日本で唯一のものということになる。加えて、「家康公の時計」は4百年前の部品がそのまま残っている可能性があり、そうなれば「世界最古のぜんまい式時計」であり、世界的にも唯一無二の貴重な時計となるかも知れないのである。

著者は「家康公の時計」の価値として次の三つを挙げている。一つ目は、スペイン国王フェリペ2世のお抱え時計師ハンス・デ・エバロが1581年にマドリッドで製作したものであるということ。二つ目は、16世紀のフランドル時計ということ。そして三つ目は、99%オリジナル部品が現存していることである。

こうした価値が高く評価され、「家康公の時計」が、平成27（2015）年4月17日の家康公の四百年大祭までに、国宝に指定されるかどうか、注目が集まっているようだ。

ばんどう しょうじ（教授・スペイン語学）